

三重県障害者施策推進協議会 令和3年度第2回手話施策推進部会概要

日時 令和4年1月21日（金）14時00分～15時30分

場所 三重県津庁舎 6階 65会議室（三重県津市桜橋3-446-34）

出席者 別紙のとおり

主な発言（敬称略）

事項3 （協議事項）第2次三重県手話施策推進計画の取組状況について

（【資料1】の昨年度意見に関わる項目について、事務局から補足説明）

・**1(1)②**知事定例記者会見について、9月に知事が交代し回数が増えたが、（従来通り）全ての回に手話通訳を配置している。現在、広聴広報課において（手話通訳者の資格を持った）会計年度任用職員1名を要求中。また、定例記者会見では、県のインターネット放送局で常時手話通訳者を映していることを案内していく。

・**1(1)⑥**文化施設における講演会で手話通訳がある場合は、開催案内の際にその旨（文化施設の）ホームページで周知をしているところであるが、三重県聴覚障害者支援センターのホームページにも併せて掲載し、情報を取得しやすい環境整備を進めたい。

・**3(1)④**県民向け手話講座では、市立図書館で手話での絵本読み聞かせを予定している。県立図書館のほうでも、引き続き前向きに実施を検討していきたい。

・**3(3)②**学校設定科目として、手話に関する授業を実施している県立高校の中には、活動の様子をホームページで紹介したり、学校間で手話を使ったオンライン交流を行ったりしているところがある。

・**4(3)②**三重県子ども心身発達医療センターでは、かつては三重県聴覚障害者協会（以下、「協会」と記載。）と協力して難聴児の交流の場「サマースクール」を実施するなど連携していたが、当該センターの移転やコロナ禍により残念ながら中断している。今後、保護者向け講座や難聴児の支援のあり方の検討を通して、協会を含めた当事者との連携を深めていきたい。

・**【数値目標の現状】**手話通訳者の派遣件数については、今回から県の記者会見等への配置を含んだ数値にしている。令和2年度末時点の数字も、それに合わせて置き換えた（下線部）。

（質問・意見）

委員 **1(1)②**（補足説明について）会計年度任用職員については、どこまで決定しているか。

事務局 任用するための予算を要求中という段階。任用職員が決まるかどうかはまた別の話。

議長 予算は3月の議会で最終決定だと思う。それに向けて1名要望中という現状。運動の成果が実るとよい。

議長 **1(2)①**遠隔手話相談3件、遠隔手話通訳対応2件について、地域性はどうだったのか。また、この件数の要因は、情報提供が少ないことにあるか。

事務局 地域性については、後日確認し、回答させていただく。遠隔手話通訳サービスは、コロナ対策で始めたもので、手話通訳者の同行が難しい場合、医療機関を受診する場合という取組であるため、この利用件数になっている。

【障がい福祉課補足説明】

- ・相談は、3件とも津市の方1名の利用でした。
- ・通訳は、2件とも桑名市の方1名の利用でした。本人が新型コロナウイルス感染症に感染したわけではありませんが、県外の病院を受診するにあたり、新型コロナの影響で診察室に人数制限がかかっており、手話通訳者が同行できなかったことから利用されました。

委員 1(2)③電話リレーサービスについて積極的に周知をしたとのことだが、受け手側、窓口に対しての案内もしたということか。行政だけでなく、企業も含めて。

事務局 そうである。サービスを知らない、受け手側が電話を切ってしまった、不審に思って対応してもらえなかったという話も聞いているので、そういった観点で周知をした。

議長 3(2)①職員に対する手話研修の実施について。オンライン研修のメリット・デメリットが分かったとのことだが、具体的に、手話の研修ならではのところを。

事務局 手話に限らない共通のメリットとしては、遠方からの参加、1つの自治体からの複数人の参加、周知先の課題であった若い世代の参加が多かった。手話ならではの点としては、オンラインだと受講者自身が手話をしている姿が映ること。緊張感もあるし、よく見えて良かったと思う。デメリットは、通信が途切れて逆に見えなくなったり、タイムラグが生じたりなど、講師の方はなかなか苦労されたと思う。

議長 逆に、オンラインだと参加しづらいという年配の方もおられたということか。

事務局 若い職員にサポートされながらという方も見受けられた。ただ、やはり単独で参加する年配の方は少なかったもので、それはデメリットかもしれない。

委員 次年度以降、完全オンラインにしてしまうのか、ハイブリッドか、完全対面に戻すのかというのは、状況を見ながらか。あるいは、ある程度の方針は出ているのか。

事務局 この事業は協会に委託しており、まだ受講者アンケートのまとめが上がってきていないので、その結果を見てから検討したいと思っている。未定である。

議長 4(3)②(補足説明について) サマースクールは、とても良い企画だと思うので、コロナが収まったらぜひ実現してほしい。私は岐阜聖徳学園大学で当事者の子どもたち、大学生あるいは成人の方たちと一緒に交流する機会があった。子どもたちは多くの先輩を見られ、保護者と成人の方との懇談もとても有意義だった。うちもコロナの影響で去年から実施できていないが、ぜひこうした会をやってもらえたら。

委員 三重県手話サークル連絡協議会としては、コロナの影響で、ほぼこの2年間、行事が全てというほど出来なかった。各サークルも、休んでは再開し、また休んで…の繰り返し。中には「コロナが心配なのでサークルをやめる」という方もいて、ちょっと厳しい現状。早くコロナが収まってほしい。また、会員は年配の方が多いのも厳しい。若い人に来て欲しい。

【数値目標の現状】(手話通訳者数) 通訳者を増やしたい。当初、とこわか(国体・大会)開催に向けて確か目標は600人程を目指しているという話があって、そんなにできるのかと思っていたが、やはり現状は本当に少しずつしか増えていない。何とかいい方法があれば。

【障がい福祉課 補足説明】

- ・三重とこわか国体・三重とこわか大会では、全国障害者スポーツ大会課において、聴覚障がいのある方への情報提供やコミュニケーション支援を行っていただく「情報支援ボランティア」600人の募集が行われました。そのうち、“日常会話ができる程度の手話能力のある方または手話を学んだ経験がある方で、かつ筆談に関し経験または関心のある方（聴覚障がい者も含む）”を応募要件とする「手話・筆談」は500人で、応募された方には、情報支援ボランティアとして活動するための手話・筆談の基礎知識と、実施競技や用語などを学習する研修会が行われました。

2(1)⑤講師の高齢化という課題に対しては、どのように検討しているのか。

議長 岐阜県も全く同じ状況。私も岐阜県の手話サークル協議会の会長を務めているが、サークルでは長く休会になっているところや、定例会ができないところがある。うちの手話サークルも、まん延防止等重点措置で公共施設の利用制限がかかったので、来週からZoomでの開催に切り替える。そうすると、若い人が入ってくる。特に若いうち、サークルに来ることが少ない方たちが参加して、10~20人でゆったりしている。画面の向こうに家族の風景も見える。入ってくる方は限られるが、こんな方法でも繋いでやっている。三重県のサークルの悩みも本当に深いものと思う。このような状況下で、若者の育成や講師の高齢化に伴う対応はどうしたらよいのかという観点。

委員 Zoomに入る人数は限られているが、何人くらいとしているのか、また、技術を教えるのは大変だと思うがどう指導しているのか、参考にして三重県でもやりたいので教えて欲しい。

議長 もともと30名ぐらいのサークルで、Zoomでは、そのうち10数名が参加。Zoomは、私個人契約で有料のプランを使っているの、最大100人まで参加できる。でも、仮に100人参加したら手話が小さくて見えないので、画面は9コマあるいは多くても16コマぐらいまででないといけない。内容は、新しいことを覚えるというよりは、手話表現の楽しさを感じることを、聴覚障がい者とともに進めていく形。聴覚障がい者と健聴者と半々ぐらいの参加。これは、従来の形では到底起こらないこと。Zoomでやると、若い聴覚障がい者が休まず来てくれる。例えば、手話を使ったクイズや、ある状況を示した絵をもとに、各自の表現を紹介しあうといったようなことをやっている。子どもたちも参加しているので、初めは指文字のしりとりなども入れている。でも1ヶ月もすると、やることがどんどんなくなっていくので、たまに自分が手品をやったりと、余興を混ぜながら退屈しないようにやっている。

委員 ZoomやSNSなどの新しいツールを使うと若いうちが参加して、聴者の参加者の年齢も下がるとということが参考になった。通訳者の養成については、順調な人でも手話と出会ってから通訳になるまで10年近くかかる。出会う年齢が重要。出会うのが30代だと、通訳者になるのは40代、活動を続けると50代。職業としての手話通訳者が担保されていない。三重県では、子どもたちに手話の普及を図ってもらっていて、手話に対しての馴染みや理解はすごく広がっていくと思うが、勉強を進めてもらうための「出口」がなく、通訳者に結びつかない。先ほど、県広聴広報課では会計年度任用職員で検討するとのことだった。一歩進んでいるとは思いますが、先日3団体（協会、三重県手話通訳問題研究会、三重県手話サークル連絡協議会）で要望したとおり、広聴広報課だけではなく各部署で手話の資格を

持った方が入って、いろいろな施策展開にも関与できる形を考えていただきたい。ぜひ、この手話部会からの発信で、有資格者の正規職員の雇用を進めていただきたい。

議長 子どもたちが憧れるような、手話通訳を仕事として生きていけるようなことが見えてくると、さらに機運が高まると思う。

委員 ろう者として思うところを。1点目、とこわか大会について。聴者であり手話を使わなかった母が、生まれつきろう者である娘（母から見れば孫）と話したいからと、50代で手話の勉強を始めた。とこわか大会の情報支援ボランティアにも登録。本当はパソコンがとても苦手だが、知り合いの協力が得られたので一生懸命接続して、オンラインで手話の勉強をした。とこわか大会には、たまたま娘が陸上選手として参加予定だったことなど、いろんな繋がりがあって、母は手話でコミュニケーションできるのをとても楽しみにしていた。中止になってしまい、非常に残念な思い。でも、母はそのまま勉強を続けていて、今はもう70代になり、通訳ができるレベルではないが、孫とは手話でコミュニケーションができています。とても良い環境だったと思う。2点目。聾学校の先生方について。異動が多い。ほとんど手話が出来ない先生が赴任されて、聾学校で手話を勉強して腕を磨いたのに、また違う学校に異動してしまう。手話ができる先生やろう者への理解がある先生が欲しい、転任していかないようにしてほしいと、保護者からの声がたくさん届いている。私も同じ思い。しかし違う見方をすれば、手話を知らない先生が聾学校へ来ることで手話を覚えられるとも言える。転任先でも手話を使ってほしいし、勉強を続けてほしい。聴者の学校でも、生徒の保護者がろう者の場合がある。そのときに、手話でコミュニケーションできる。手話のできる先生を増やしていただきたい。

委員 とこわか大会の情報支援ボランティアについては、6年間にわたり、たくさんご尽力いただいたことに、協会からも感謝したい。養成講座もなかなか開けなかった。私もすごく楽しみにしていたが、結果的にコロナで中止になってしまってとても残念。しかし、私としては良い経験になったと思っている。Zoomで講座を開いたり、他の方法についても色々皆で検討した。

手話奉仕員養成講座などで派遣してもらっている講師の高齢化が進んでいる。指導者を増やさなければいけない。将来的に考えるとZoomなどを使った指導に変わっていくのかなと思う。先ほどオンラインでという話があったが、私も同感。

県立高校での手話の指導者も増やさなければならない。色々な学校からの依頼が増えるかもしれない。今の状況のままだと厳しい。将来的にいい方法を考えて、今から準備していかなければならない。Zoomという方法があるのは良かったと思う。高校生は覚えるのがとても速い。手話ができるようになりたい、通訳者になりたいという夢を持っている。佐藤委員の言うように、次の段階につなげていく方法も必要。

また、私はろう者だが、聴覚障がいや手話の表現にも色々ある。当事者と交流を深められたら。オンラインで、聾学校と他の県立高校が交流した。本当は対面での交流ができた方がいいが、オンラインで実施してみたら、「楽しかった」「もっと話したい」という声も頂いている。それがきっかけで手話の授業を学校設定科目としている県立高校9校とオンラインで交流できたらいいと思う。その方法で手話を使って話す機会を作れたら嬉しい。

議長 聾学校の先生に関する意見について。岐阜県の飛騨特別支援学校の校長は、手話通訳士。教頭は、登録手話通訳者。今度、さらに、手話のできる聾学校幼稚部の先生がそこへ行って、聾学校が周りに無いその地域で、難聴幼児の教育相談などに携わるようになった。こういう風に、聾学校を経験した先生が、知的障がいの生徒を中心とした学校に行き、地域ケアを始めている。そういう先生方が地域に広がっていくことも、色んな意味でいい影響があると思う。その校長先生は、知的障がいや自閉症などの教育にも手話が有効に使えるのではないかと研究した方。そういう波及効果もある。

委員 人事異動はルールに基づいて行われるものなので、年限は一定ある。その中で、学校は子どもたちが学ぶ場であって、教員が手話を学ぶ場ではない、といった意見もいただいているけれども、今日のご意見のように、聾学校を経験することで、初めてそこで手話と出会う教員もいる。一定年数勤めたあと、地域の小中学校あるいは高校へ転任して、そこで手話でのコミュニケーションを行っていく。あるいは、他の特別支援学校の場合でも、議長のお話のように、知的障がいや自閉症の方のコミュニケーションでも使えるというような話も聞いている。あらゆるところで言語としての手話が広がっていくことを期待するし、教育委員会としても積極的に手話について学校に働きかけていく努力をしていかなければならないと改めて感じた。

委員 伊勢市の手話通訳者のアイデアだが、コロナ禍でろう者の方が気軽に市役所に来れないということがあったため、昨年12月から、伊勢市手話サービスということで、LINEのビデオ通話機能を使って、市役所に電話と同じような形で手話を使った問い合わせができるようにしている。手話サークルがコロナでなかなか集まれないということもあるが、他方、このような状況で新たに生まれたこともあるので、引き続き色々な形で、皆さんのご意見を伺いながら新たな取組を行っていききたい。

委員 意見ではないが、ショックを受けたことをお伝えしておきたい。昨年12月29日、三重テレビで、特別番組が放映された。とこわか国体・大会についての内容だった。楽しみにしていたが、その番組の中で、字幕がついていない部分があった。実行委員長ら3名が質疑応答しあうような場面が合間に出て来たけれど、字幕がついていないので何を言っているか分からず、非常にショックだった。県から特別番組がありますよと言われて楽しみにしていたらそういうことだったので、非常に残念に思った。これを報告したかった。三重テレビに意見を出すのがいいと思ったが、やはりここでもお伝えしておこうと。

議長 より一層、情報保障への配慮をお願いしたい。

委員 4(1)③令和4年度の取組について。聾学校以外の教職員が参加できるような研修等の計画について、対象者数や回数を教えてほしい。

事務局 後日確認し、回答させていただきます。

【特別支援教育課補足説明】

・30名程度を対象とした「公開手話講座」を8月上旬に計画しています。内容は、①きこえないということ、②聞き間違いやすい言葉、③簡単な手話表現を予定しています。

委員 3(3)②（補足説明について）高校での取組の話をもう一度。

事務局 少し細かく説明すると、文化祭で発表した手話歌の様子をホームページで紹介した学校や、聾学校と手話を使ったオンライン交流、例えば自己紹介やゲームを行った学校があった。

委員 障がい福祉課の手話言語条例のホームページに掲載されているのか。

事務局 当課のホームページではない。学校ごとにホームページを持っているので、そこに掲載されている。

議長 例えば三重県聴覚障害者支援センターのホームページにそういった良い取組を、リンクを貼って紹介したら、聴覚障がい者の方も興味関心を持ってもらえるかと思うので、ご検討を。